

まずWi-Fi スポット連携が浮上 携帯電話の付加機能化もトレンド

WiMAX事業の入り口が見えてきた。先行するYOZANでは無線LANスポットのバックホール回線に利用する。ほかにも携帯電話や固定系通信との連携など、多様なサービスモデルが実現しそうだ。

WiMAX技術が現実のものとして眼前に現れたいま、業界の関心は「WiMAXはビジネスになるか？」という点に移ってきた。

そこで本稿では、現段階で考えられるビジネスモデルの類型を予測し検証するとともに、先行してサービスを開始するYOZANのビジネスモデルケースとして紹介したい。

WiMAXのビジネス展開を考えたとき、FWA(Fixed Wireless Access)型、無線LANスポット型、携帯電話補完型、FMC(Fixed Mobile Convergence)型、ユビキタス型の5つの類型があげられる。

まず、のFWA型を見てみよう。ここでは先行して標準化された「IEEE802.16-2004」技術が使われる。ルーラル地域など、新たに有線網を敷設するのが困難な地域の“ラストワンマイル”アクセス向けにWiMAXを適用するものだ。

IRIユビテック・ユビキタス研究所の干場久仁雄研究企画部長は、「インターネット普及率の高い日本でも、

共同住宅やテナントビルなどでは、高速ブロードバンドが使えないケースがある」と指摘する。これに山間部や島嶼部など地方部の需要を加えたニッチ市場に、商機がありそうだ。

米国のベルサウスがこの8月に始めたサービスや、英国のBTが実験を進めているモデルがこれになる。

ノートPCに搭載

無線LANスポット型も有力な手法。インテル、セールス・マーケティング本部の梅野光プロダクトマーケティングマネージャーは、「Wi-Fiを標準搭載したCentrinoのように、いずれノートPCや携帯端末向けチップセットにWiMAX機能を標準搭載させていくと製品戦略を説明する。この場合、モバイル機能対応の「IEEE802.16e」の登場以降が本格的な普及期となるだろう。

先行して、無線LANスポット事業者がバックホール回線としてWiMAXを利用する形態が普及の可能性を見せている。

携帯電話補完型への期待は高い。最近話題を呼んでいる「iPod携帯電話」に代表されるように、今後大容量コンテンツはますます増えてくる。しかし、携帯電話キャリア各社が保有する周波数帯域には限りがある。

そこで、3G携帯電話は「音声+ギャランティー(帯域保証)型に近いデータ通信」として運用。一方、都市部などトラフィックが集中する地域では、携帯電話網に加えてWiMAX網を整備し、「プラスアルファのベストエフォート型」としてユーザーに訴求する考えだ。

このコンセプトでは、携帯電話のように「いつでもどこでも使える」必要はなく、少ない設備投資でWiMAX網を構築できるメリットがある。

キャリア視点で見れば、「付加価値の付与」「トラフィック集中を避けるためのバイパス」という側面が強い。WiMAXサービス単体で新たな収益をあげようという考えは、あまりないようだ。

諸外国だと状況が変わる。いち早く3Gシフトを終えた日本と異なり、欧米やアジア諸国では、これから本格化する3G網構築の設備投資が大きい。



Wireless Japanに展示されたYOZANのWiMAX機器

特集 ① 徹底検証!
WiMAXの実力